岩手県立大学社会福祉学部紀要　第7巻第2号（2005.3）31－41

# 若きソーシャルワーカーのライフヒストリー研究
## （その2）異分野からの参入者の専門職アイデンティティ

鈴　木　眞理子

# A Study on Life History of Young Social Workers
## (2) Professional Identity of two Male Participants from Different Field

Mariko SUZUKI

In the previous article(Suzuki, 2003), there introduced two high school graduates who had no knowledge on welfare, but started acquiring professional skill and knowledge enthusiastically through their work. We followed how they become qualified as social workers. They learned to gain professional knowledge and more they leveled up more they had incentive. After they became qualified, they still grew up as well-experienced workers.

In present two cases, they start from actual workers without much professional knowledge but eventually they acquire national qualification as social workers. That gives them self esteem and high level of profession. In other words, qualification has more meaning than only gaining skill and knowledge. It gives satisfaction to the ones who acquired the qualification and that leads to their self esteem on their work. This has a good effect on the quality of their work because more confident social workers become, they serve better. There is also a fact that qualification changes nothing in what they can do compared with other qualification which legally allows the profession such as lawyers and doctors. However, qualified social workers tend to be proud of their work and skill. The workers brush up their skill and as a result they are accepted as skilled and experienced workers.

There are also qualified social workers who graduated from non-welfare department, but happened to start working as social workers. Although they are similar to the workers in previos article, some differences are discussed.

## Ⅰ　異分野から参入した男性2人のライフヒストリー

### 1．二事例の位置づけと特徴

前稿では、地方の全く福祉に未知の高卒者が福祉関連分野に就職し、業務を通じて専門的技術や知識に目覚め習得していくうち、大学卒に準じる国家資格である社会福祉士を取得したいという憧れを実現した2事例を紹介した（鈴木2004）。そこでは資格取得の勉学のプロセスで専門的知識を蓄積し自信を深めていく様、また取得後、それまで払った努力や苦労が花開いたというべきか、一回り視野が大きく余裕ある専門職として成長している姿を描いた。実際業務を通じてすでに専門職者になっているのであるが、国家資格取得によって、その保証書を得て自信と余裕という最後の仕上げにつながったと言える。

このことは名称独占の資格取得とは、ある意味で取得者の自己満足のためであり、それが業務での自信と余裕につながり、このプラス面がかなり大きいということを示している。業務独占の医者や弁護士資格では資格がないと実務はできないが、名称独占の資格では

無資格者でも同じ仕事は誰でもできるので、取得によって変わることは何もない。しかし、本人の自信という気持ちのもちよう、また周囲の認知の仕方が変わってくる。そして、それが実践活動に冴えと磨きをかけ、相互作用として業務にも自身や意欲が出てくる。

そのような社会福祉士資格の中途取得者の事例として、今回は異分野の大学卒業者がたまたま福祉の仕事に就き、自分のアイデンティティのよりどころとして国家資格を取ったライフヒストリーを２つ紹介する。

## ２．心理職希望が叶わず福祉現場へ
## ～Ｃ雄さんの生活史～

①　就職前

両親共働きの家庭に３歳年長の姉の下に出生。学校時代、姉が夜間の福祉専門学校に通っていたので、福祉について何となく関心はあった。当時、１学年２クラスで小規模な中学校であったが、同じ学年に３、４人の問題児がいた。２年になった途端、学校始まって以来初めて荒れ、学級崩壊といわれるぐらい、授業ができない日が続いた。姉がちょうど少年院の少年たちの手記を集めた本を読んで、自分にもそれを読むよう勧めた。自分はかなり大人しい中学生だったので、同じ少年の行動の違いにショックを覚えた。どうして同じ思春期の少年が非行少年になったり、犯罪を犯してしまうのか、自分の中で人の心、心理学に非常に興味をもつきっかけになった。

高校時代「生きるとは何か」「人間とは何か」に興味をもち、進学を決める段階で心理学をやりたかった。家庭の経済的事情から公立大学しか進学できないということで、関東の公立大の人間学部の心理を専攻した。臨床心理のほか、教育学、心身障害学を学び、それらの知識は心理学同様、現在の仕事にも生かされている。

②　就職～５年目

大学指導教官からは大学院進学を勧められたが、親を安心させたいという思いから地元に戻って就職しようと県の心理判定員を受験、合格するが最終採用からもれた。県職員ではなかったが、社会福祉事業団で採用された。当初は県職員として児童相談所に務めるのが希望であったが、まず就職して独立することが優先でもあった。社会福祉施設で働くのも経験として役立つのではないかという思いと、再び心理職の募集があれば移れるかもしれないという軽い気持ちで、事業団の施設職員として働きはじめた。

最初の職場は、定員300人の知的障害者施設で、知的障害児については実習の経験もなく、初めて身を置いた。大学時代、障害について学んだことはあったものの、すべて初めての経験で、利用者について改めて勉強する日が続いた。その頃の知的障害児の施設の処遇は、どちらかと言えばしつけや訓練という名目で型にはまった行動を押し付けることが多かった。疑問を感じつつも知的障害者の権利擁護については、その当事周囲も自分も全く無知であった。

仕事について１年足らずの頃、担当していた利用者が、突然道路で走り出して交通事故にあうという事件に遭遇した。それまでの自分なら過失と注意不足、業務上の責任の重さや反省で身の置き所がなく逃げたくなるはずであるが、これを機にもっと強い仕事への意欲が自分の中に湧いてきた。

彼らを守ってやるのは自分しかいないのだという強い使命感と意気込みだった。今思えば随分気負った不遜な考えであるが、自分の中にそんな保護者的強さが湧いてくるのが不思議でもあった。

２年目の24歳、非常に印象に残る利用者との出会いがあった。それは自閉症児で、自分の思うように動いてくれないので壁にぶち当たるような気持ちにさせられることもしばしばだった。しかし、逆に非常に関心をもって自閉症児の研究会に参加し始めた。当時勤務した棟は、一般棟（中軽度棟）であったが、自閉症児が多く、問題行動やトラブル、喧嘩が絶えない寮棟であった。その中の１人、17歳の少年は、気に入らないことがあると箒を持ち出して職員を叩き、ビデオテープの収集にこだわり、興奮して夜も寝なくなったり、トラブルが多かった。

この利用者に対し、受容的対応を心がけ、嫌なことは無理強いしないこと、暴力的行為を取らなくても要求は聞きいれられることを伝えることに務めた。その結果１年以上かかったが、暴力的行為はなくなり、話を素直に聞くようになっていった。さらには、言葉による要求も増えて、夜間職員宿舎にやってきて、他の利用者とのトラブルを解決してほしいと言葉で訴えられるようになった。

もう一人の利用者は当時14歳でＩＱは軽度の知的障害で理解力はあったものの、こだわりが強く、自分の思い通りにならないと、他の利用者をたたいたり、ガラスを壊すなど破壊行為もあった。またすべて都合の良いように嘘をつく傾向もがあった。これはそれまで

の施設では、規則を破ると罰として自分の要求が叶えられないことが分かっているので、それを避けるために嘘をつく習慣が身についたととらえた。また切手収集に固執していたが、ルールを破ると切手をもらえないことを伝えていった。その結果、徐々に嘘をつくことはなくなり、自分の要求も正直に表現し、気がついたら物への固執も減り、それが人との関わりへの興味に移行していった。この利用者は当時、多くの人から「問題行動があるから、養護学校高等部への進学は困難」と言われていたが、この施設で唯一人、高等部に進んだ。

就職して４年目、知的障害者施設の中には保育士や看護婦など他の専門職もいるが、特に社会福祉の施設職員としての専門性のアイデンティティに疑問を強く持つようになった。自分自身は心理学をベースとして仕事をしていたつもりだったが、施設職員としての社会福祉援助職とにずれを感じていた。ちょうど国家資格ができたことでもあるし、新しい社会福祉援助職としての専門性も獲得したくて、国家資格をとろうと通信教育を受講しはじめた。

③　就職６年～10年

ちょうど県庁に事業団からの人事交流で1年間出向した。出向ではあっても業務は県庁職員と同等のもので、勤務は毎日残業で深夜にわたり、学習時間を確保することは容易ではなかった。業務内容は庶務、及び予算経理で、県庁の施策の財務を知ることができ、各課の経理担当者と協力して一つの県の仕事が形成されていく調整の過程、また組織での効果的指揮命令の在り方など、施設の業務と異なる内容を体験できたことは良い経験になった。

また受験勉強の時間は取れなかったものの、施設職員として当直や早番、遅番の不規則な勤務時間から開放され、施設勤務の利用者のことが頭から離れない状態から精神的に解放されたことは幸いした。また国や県の制度・施策について県の職員に直接情報収集できて、試験対策にも役立ち、一発で合格した。

受験勉強で特に印象に残っている内容だが、当時新しい障害の捉え方「ＷＨＯの障害の３つのレベル」を知り、現場であれほど障害者に接していたのに理論的に捉えていなかったのか、目から鱗の経験をした。

それまでは知的障害者をどうにかして変えていこう、自分の思い通りに動いてもらおうという意識が強かったが、障害のレベルの学習をして、「機能不全、行動障害、社会不利という障害のレベル」で分けて考えると、本人に変ることを求めたり、施設生活の枠にすべて封じこめる必要もなく、本人よりも環境や周囲の人が変っていけば良いこと、もっと地域や社会制度に解決策を投げかければ良いことに気づいた。

また社会福祉援助技術など専門的な知識の基礎を得られたことは、それまで「福祉系大学卒業者の専門性とは何か」という疑問や不満への回答がある程度見出せたので、福祉専門職としてのアイデンティティに自信がもてるようになった。

県庁在職中、当時31歳の若手の主事が、こちらの動きを読んでいるよう適時に説明・助言してくれていた。一つの県の施策を形にする手順、業務のつぼを心得ており、上司や同僚から強い信頼を置かれていた。事務職の役割と面白さが理解できた。

１年で再び同じ事業団の施設に戻った。同じ施設でも棟担当職員ではなく、相談指導課という６つの棟全体を管轄とし、利用者と行政の連絡調整を行なう多忙な部署であった。４人の職員皆仕事のよくできる人であったが、中でも自分が一番若く雑務など仕事が多くなり、県庁に続いて残業が当たり前の忙しい勤務状況だった。

内心は前の棟担当職員の直接生活支援業務がしたかったが、客観的に寮棟の処遇を外から見ることができた。権利擁護の問題なども強く意識するようになり、地域や家庭、関係機関との連携のし方を考える良い機会になった。

近年すべての福祉分野で在宅生活での自立支援のためのデイサービスや訪問サービス、リハビリの重要性がいわれているが、この部署での１年間は知的障害者ケアの全貌を理解し、施設の今後の役割を考えるのに役だった。

就職して９年目、同じ事業団の定員50人すべて最重度である知的障害者施設に移動し、自閉症児の生活支援職員として働き始めた。

④　就職10年以上から現在

直接ケアの現場に戻って慣れたころ、大学の実習業務担当として出向することになった。自分が希望したわけではないが、社会福祉士養成と福祉心理コースがある学部で、自分が社会福祉士資格や心理判定員の資格があることから白羽の矢がたったらしい。この新設学部は全学生に社会福祉士・ソーシャルワーカー資格取得を掲げ、関係教員もソーシャルワーカーの基礎技

能を教育しようという意気込みがあった。

実習業務担当室は県や社協の職員など6人、保育士から精神保健福祉士や介護福祉士まで6種以上におよぶ資格実習の連絡事務など裏方をそれぞれ担当した。ソーシャルワーク演習などの授業のアシスタントに入る機会もあり、大学でソーシャルワークを学んでいない自分は、各教員からソーシャルワーク教育の真髄を学ぶことができた。

特にアメリカやカナダでソーシャルワークを納めた教授陣が多く、日本の現場ですぐ役立つかはともかく、社会福祉士の援助技術の本で学んだ内容とは全く異なった世界を知ることができた。

大学でのソーシャルワーク教育と現場の実践技術とのギャップも感じ、ソーシャルワーカーとしての倫理や価値の教育が、人生経験の少ない学生にどれだけ理解できるか疑問に思った。現場を9年経験した自分でもソーシャルワーク実践の理論化、学問化は難しいと感じずにはいられなかった。

日本社会福祉士会には最初から入会し、特に県レベルの研修会にはできるだけ参加している。変則勤務のため土日出勤が多く、委員会活動はあまりできないが、会員との人的なネットワークは大変貴重だと思っている。職場での社会福祉士取得の第1号であり、先輩で挑戦した人はいなかったし、処遇などの技術や知識面を勉強してリーダーシップを発揮してくれる人もいなかった。そこで、自分が得た新しい施策や理論の提供、事例の理論化などを心がけ、適切に後輩に指導していくのが自分の役目と自覚している。

大学に2年いた後、もとの知的障害者施設の重度棟に異動し、50人ほどの利用者と接している。特に二人の利用者に新しい試みの「表現援助法（facilitated communication)」に基づいた指示を書いて、気持ちを表してもらう支援を試みている。この方法は2者に共通の決まった話題、また回答がいくつか限定されるような質問の場合は判読しやすい。普段人間関係がうまく行っている人には有効だが、誰にでもできるものとは認められていない。

このやりとりも3年目に入り、自分の担当する一人の利用者はかなり情緒がパニックになっている時でも、書いて表現してくれるようになった。研究者の間でもこの方法については、賛否両論意見が分れており、すべての知的障害者に応用できるとは言えないが、自分はコミュニケーション手段として有効性を探っていきたいと思っている。きちんとした研究論文にまとめる必要性を感じているが、時間的にもエネルギー的にもいまの自分ではむずかしいかもしれない。

支援費制度になってより重度の知的障害、自閉症者という自分で意志表示のできない、また自分の自己決定も、ニーズさえ自覚することのできない利用者の本当のニーズをどう掬いあげるかが重要になってくる。それを掴むため、あらゆるコミュニケーション手段を駆使しようとする姿勢、意気込みは社会福祉士になってより強くなっている。実際、受容的態度や家族への質問の仕方、アセスメントなどもソーシャルワーカーらしくなっていると思う。

結婚は28歳の時で職場の保育士で、自分がちょっと守ってあげたくなる女性だった。結婚して子供が二人でき、共働きができるタイプではないので専業主婦をしている。自分の家庭生活は職業生活と同等の重みを持ち、マイホーム主義と言われようと妻や子供のために自分の家を持ちたかった。車が運転できない妻のため、2年前に市内の比較的便利な場所に新築した。

ローンや家の管理が大変であるが、二人の子供の成長と安定した家庭生活は自分にとってやすらぎと楽しみの場であり、仕事と同様に大切である。ちょっと気が弱くて子育てに悩みやすい妻のためにも、育児や家事に積極的に係わるのが自分のライフスタイルである。7歳と5歳の子供に、自分が育った頃の自然や地域の豊かさを伝えるため、父親としての責任を果たすのが、個人生活での大きな生きがいである。むしろ子供が小さなうちは家庭生活を優先する姿勢を持ちたいと思っている。

これからも施設職員として、長く携わった知的障害者だけに限らず、広く障害者が家庭や地域で暮らす環境づくりに携わっていくとともに、将来的には施設職員の管理者として、若い職員を育てる技量をもちたいと願っている。

表1）に以上の経過をまとめた。力量形成の14項は前稿(鈴木2004）に述べてある。表2）についても同様である。

表１）Ｃ雄さんの専門的力量形成過程と契機

| 年齢 | ライフステージ | 印象的な出来事 | 力量形成の契機（14項目） |
|---|---|---|---|
| ０歳 | 共働き家庭に生れる | | |
| 14歳 | 中学２年 | 中学校が荒れ、学級崩壊などで非行少年に関心もつ | |
| 18歳 | 高校３年 | 人間に興味を持ち、国立大学心理学専攻 | |
| 22歳 | 大学卒業 | 郷里に帰る。県職の心理判定員に合格したが、採用がなく、事業団に就職。福祉現場は全く未知だが、意欲もつ | |
| 23歳 | 知的障害者施設職員 | 利用者の交通事故を契機に仕事に意欲をもつ | ②自分にとって意味ある職場に赴任 |
| 24歳 | | 自閉症者への関心が深まり、受容的対応に努める | ①社会福祉実践上の経験 |
| 26歳 | | 他の専門職者との比較で自分の心理のルーツをソーシャルワークに変換したく社会福祉士取得に挑戦 | ⑥職場外の研究や研修 |
| 27歳 | 県の福祉部総務課に出向 | 県の政策と各課の財務調整の過程を理解する<br>勤務時間が楽で通信講座と受験勉強しやすかった | ②自分にとって意味ある職場への赴任<br>③職場内での優れた先輩や指導者との出会い |
| 28歳 | 社会福祉士合格<br>知的障害者施設の相談指導課 | 心理からソーシャルワーカーにアイデンティティ移行<br>施設と地域の連携の仕方、家族への援助など新たなソーシャルワーク業務で多忙をきわめる　　結婚 | ⑭社会福祉士取得<br>⑨地域と職場への着目 |
| 31歳 | 同じ組織の県南の知的障害児施設に転勤 | 最重度棟の自閉症児童の生活指導職員として以前の直接ケアに戻る | |
| 32歳 | 大学の実習担当として出向 | 多種の福祉関係実習業務に携わると同時に、ソーシャルワーク教育を初めて体験<br>研究費がつくので、県外の施設・大学の視察研究 | ②自分にとって意味ある職場への赴任<br>⑤職場内での研修や研究 |
| 36歳 | 事業団の知的障害者施設の最重度棟 | 重度の知的障害者への表現援助法を通じてコミュニケーションの可能性を追求 | ①社会福祉実践上の経験<br>⑤職場内での研修や研究 |
| 37歳 | 自宅新築<br>長女小学校入学<br>長男幼稚園入園 | 協力を必要とする妻のため、便利な市内に新居移転<br>二人の子供と妻を大事にして、家庭と仕事のバランスを取る自分のライフスタイル | ⑬個人及び家庭生活における変化 |

### 3　一般企業から社会福祉協議会に転職
### ～Ｄ夫さんの生活史～

①　就職前

Ｓ市で祖母と母が理髪店、父親がサラリーマンの家庭に生まれる。５歳の時妹が重度の知的障害をもち産まれる。母親は障害児の親の会の立ち上げにも参加したが、特別中心になる指導者というわけではない。しかし、妹を乗せて外出するため、乗れなかった自転車を覚え、後に通学のため運転免許をとったり、妹のためにできるだけのことをしていた。医者や専門家のいうことに従って過保護に大事にするのでなく、基本的なルールなど結構厳しくしていた。そんな日常生活で家業と妹の世話に追われて、兄の自分のことにはあまり手をかけられず済まなかった、と後になって言われた。

しかし、自分は障害児である妹のことで周囲から偏見の目やいやな思いをした記憶はなく、むしろ施設や養護学校に遊びにいって知り合いも多く、障害者の家族としてマイナス面よりプラス面が多かったと思っている。小学から中学まで、重度の障害児である妹と共に暮していたので、福祉についてはあまりにも身近すぎて、ボランティアなど関心を持たなかった。

郊外の自然の中で仲間と遊びまわり、いたずらをしたり普通の屈託のない少年時代を送った。唯一９歳の時から町道場で始めた柔道は、兄弟がわりの仲間ができ、精力の発散でもあり、大会に出て上位に入る勝つための柔道ではなかったが続けた。

高校は共学だが、男子が圧倒的に多い私学の１年の時、些細ないじめから２、３週間、登校拒否になった。今では原因を思い出せないくらいだが辛くくやしい思いが高じて、学校に行けなくなった。家族や先生も巻き込み、相手が自宅に謝罪したことで仕方なく、学校に行き始めた。

暫く後に体育の授業でちょうど得意の柔道だったので、相手にしっかりお返しをしてすっきりした記憶がある。この時も柔道をやっていて良かった、救われたという思いがある。柔道の競技や試合よりも、それを介在にした人間関係、自分の属する場として柔道に一生かかわると確信した。

付属高校だったのでエスカレーターで上の商学部に進学。大学ではサークルにも入らず、また体育会系の柔道部などとても入る気にならなかった。自分の居心地の良い場は、それまで暮らした地域で、大学で友達づくりをする暇もないほど、ひたすら柔道道場で子供たちに指導していた。

高校時代から黒帯を取りたかったので、その練習のためでもあるが、熱心に道場に通い練習するうち、小・中学生の指南役を任された。それがまた兄弟や同じ年齢の友人の少ない自分に合っていて、のめりこみ、大学には単位を取るためだけ授業にでるという感じで、ひたすら柔道場で子供たちと戯れていた。

黒帯を取ってからも大学生の遊びや活動より柔道指導の方が楽しかったから、大学にいくより道場で過ごす時間が長かった。これは中学高校を通じコンプレックスがあっても自分には柔道があって随分救われたという経験から、後輩の子供たちにそれを伝えたかったからだと思う。

また大学に進学はしたが、特にやりたいことがあったわけでもなく、ゼミには一応所属するものの柔道に明け暮れた。アルバイトと遊びにうつつを抜かす周囲の大学生と自分は同じではないと思いたかったのかも知れない。柔道の経験は今の職場での住民との行事の仕掛け役として生かされている。子供やボランティアに何でも分かりやすく説明するこつや、管理やリードするのではなく、さりげなくグループを誘導するのは身についている。

自分は柔道で試合に勝つより、地域の人をまとめ、一緒に楽しみながら何か活動するのに向いていたようだ。今になって合コンやアルバイトなど大学生らしいこともしておけば良かったと多少後悔している。

②　就職～５年目

道場での指導は続けたかったので、地元の製造業に就職した。ビンの金型をつくる製造業で社員400人ほどで地元では中堅企業で、生産管理の仕事をした。しばらくすると会社の幹部が同族に占められていること、勤続30年以上の古参部長が社長一族のいいなりで、やる気のある中堅社員は辞めて行くことがわかってきた。中小企業であるが民間会社を経験して、これ以上こんな会社でサラリーマンを続ける意欲が湧かなくなっていた。

26歳のとき、ちょうど地元市の社会福祉協議会で職員を募集していることを知り、役所の親戚くらいのものだろうと何もわからず応募した。15人受験して２人採用された。かなり倍率も高かったが面接で妹が重度障害で福祉の世界に関わりが深いことを話して、しっ

かり妹の障害を利用させてもらっている。幸運にも採用されて地域福祉係で仕事を始めた。

最初の年、精神保健ボランティア育成講座の担当になったが、妹の障害とは異なり、普通に何でもできそうに見えて障害者であると言う誤解されやすい分野で、自分にさえ多少偏見もあり、知れば知るほど新たな発見があった。彼らの中に入って直接接するしか本当の理解の道はなかったのだが、実際、そうやってきてそれでよかったと今確信している。

同じ年に印象に残る利用者に出会った。講師はそれまで県域の当事者団体の方だったが、この年初めて地元の当事者でもあるＳさんが講師となり、講座の中で仲間の会を作りたいと話した。講座には受講者以外にも当事者や保健所のワーカーが大勢参加していて、早速小規模作業所の立上げ準備会が発足した。

これは「あしたば会」となり、半年後に設立にこぎ着けた。準備の数ヶ月は夜の作業所の２階でなべをつつきながら寝泊まりしたくらい熱中した。また社協で新米だったので、こんなにのめりこんで良いか不安だったが、先輩が当事者との深い関わりを支持してくれた。仲間の会は30人から始まりすぐ50人を超えた。この会では次の運営委員が前に負けじと頑張りすぎて入院してしまい、解散の危機に見舞われた。ボランティアのグループが支えてくれてどうにか持ち堪えた。

この「あしたばの会」の溜まり場が欲しいということで、全社協の研究事業に応募して30万円もらい、宇治市のホットハウスを見学に行き、それを参考にして立上げた。これが職場外研修として印象深く、土日開設までもっていき、自分も週１回ボランティアで参加している。

この会とは個人的付き合いか、仕事なのかの区別がつかないくらい、深みにはまってしまい、自分には何もできない無力感で会にかかわるのをやめてしまおうか迷った時期がある。しかし当事者が本音でぶつかり、本心や真のニーズを表現してくれ、それにボランティアを巻き込み住民参加型地域福祉の手応えを感じた。その経験から、もがいてこそ意味があると今は言える。緻密な企画と冷めた行動ではなく、常に全力でぶつかる姿勢こそ、熱きソーシャルワーカーではないかと思う。

③　就職後６年～10年目

社協３年目の29歳、阪神淡路大震災で社協の助っ人として芦屋市に１週間派遣され、相談援助、ソーシャルワークの神髄に触れるともいえる印象深かい経験をした。被災者への一番の支えは安心感と信頼感を築き、話を親身になって聴いてあげることだと分かった。また一度要望や状況を聞いたら、それが叶えられるかどうかより、結果を必ずフィードバックすることだと教えられた。

被災者が心を痛めるのは、ただ聞きっぱなしやデーター化されるだけで、一対一の生身の人間として対応されないことで、福祉の利用者すべてに言えると思う。現地で一緒に活動した京都府、神奈川県の社協マンとは今も年１回会い、社協の仕事について語り合っている。

６年目の32歳で社会福祉士取得通信課程を開始した。職場では毎年、専門資格取得奨励ということで、社会福祉士受験者を募って通信課程に送り出してくれていた。自分は福祉系の大学を出ていないので、一人前に社協マンとして仕事をしていく上には、特に資格は取得したいと思っていた。何人かが取った次の年、誰も希望者がいない時、受かるかどうか自信がなかったが、先輩が「おまえが今回は絶対受けるべきだ」とけしかけてくれた。そのおかげでスクーリングでは全国で社協以外に知り合いもでき、いまだに同期会をしている。

いつも自分が迷っているとＧＯサインを出して励ましてくれる職場の先輩が、自分にとってはモデルであった。職場で社会福祉士受験候補生に名乗りをあげるか迷っている時も、この先輩が背中を押してくれた。

④　就職後10年以降

34歳で社会福祉士資格を取得と同時に南分室に異動し、３年間、高齢者の配食サービスや福祉資金の貸付けなどを行った。３年後再度地域福祉係に異動して、ずっと同じ職場にいる。

地域福祉係で小中学校への福祉教育ゲストティーチャーのコーディネートや講座の企画を行っているが、最近感じることは、教員の福祉に関する意識が低いため、社協やボランティアに講座を丸投げして生徒へのフォローが全くできていない。学校教員への体系的福祉研修が必要と感じる。

社会全体の若い人について、フリーターが増え健康保険や国民年金を支払わない人が増えているのが気がかりだ。小中学校で医療や老後の社会全体の相互扶助である社会保険について、分かりやすくしっかり教える必要を感じる。

結婚については特に今したいとも、したくないとも思っていないが、いままで柔道に明け暮れていたので、少し違うこともしたいと思っている。

将来は、管理職にならずに、一担当としてボランティアや当事者、地区社協等の市民活動に関わっていけたらと思っている。近い目標としては市内すべての地区社協が自前のボランティアセンターの拠点をもてるよう支援していきたい。

最終的には「障害のある人もない人も自分らしく暮らしていける地域づくり」を目指しており、これは当社協の目標でもあるので、そこで働き給料をもらう職員は、当然全員目指すべきことだと思っている。

表２）Ｄ夫さんの専門的力量形成過程と契機

| 年齢 | ライフステージ | 印象にのこるできごと | 専門的力量形成のきっかけ（14項目） |
|---|---|---|---|
| 0歳 | 出生 | 母が床屋、父がサラリーマンの家に生れる | |
| 5歳 | 妹生れる | 重度知的障害の妹の世話に母親は過保護ではないがかかりきり | |
| 9歳 | 柔道を始める | 友達や仲間ができて活発になり、格闘技の体力発散がプラス | |
| 16歳 | 私立付属高校 | 些細ないじめで２週間登校拒否になるが、謝罪により登校。相手には柔道の授業で仕返ししてすっきりする | |
| 18歳 | 大学商学部進学 | 黒帯を取るため町の道場に通い始めるが、小中学生の柔道指南に夢中で大学は単位を取るだけ | |
| 22歳 | 地元中小企業に就職 | 営業や生産管理など仕事を覚えるが、一族経営で将来への仕事の意欲がなくなり、転職を考える | |
| 26歳 | 地元社協採用（地域福祉係） | 社協が何か深く知らず応募し採用されるが、自分に合った職場で生き生きと働く<br>自分の仕事のやり方を常に支持してくれる先輩に助けられる | ②自分にとって意味ある職場への赴任<br>③職場内での優れた先輩や指導者との出会い |
| 27歳 | | 精神障害者の小規模作業所立ち上げ準備会の立上げに関わる。当事者であるSさんを研修講師に向かえ、様々教えられる<br>全社協の先進事例の視察研究事業に応募し、精神保健ボランティアの会で溜まり場作りに取り組む<br>会の運営役員が無理して入院、入れ込みすぎた自分への自信を失う。 | ⑨地域への関心の拡大<br>⑤職場内での研究活動<br>①社会福祉実践上の経験 |
| 29歳 | | 阪神淡路大震災で芦屋市へ災害ボランティア派遣 | ⑧社会的活動 |
| 32歳 | 社会福祉士通信課程開始 | 福祉系大学でないので、社協で仕事をするには是非とりたいと思っていた社会福祉士通信課程に職場派遣 | ⑤職場内での研究活動 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 34歳 | 社協内で異動<br>（南分室） | ソーシャルワーカー、コミュニテイワーカーの一員として自信を得られた<br>高齢者の配食サービス、福祉資金の貸付業務に従事し、小地域ネットワークの大切さを感じる | ⑭社会福祉士取得 |
| 37歳 | ２度目の異動 | 再び地域福祉係に戻り現在に至る<br>小中学校の福祉教育コーデイネイトや企画を通じて、教員の福祉への体系的研修の重要性と小中学校での社会保障教育、特に年金についての教育の必要性感じ、そのように先生や学校に働きかけている | ⑨地域への関心の拡大 |

## Ⅱ　二事例についての比較考察

### １　二人の主要な力量形成の契機と思われること

［C雄さん自身があげる主要な力量形成の契機］
②自分にとって意味ある職場への赴任
⑬個人および家庭生活の変化
⑭社会福祉士取得

②C雄さんは事業団の知的障害関係施設に長く従事しているが、27歳の１年間、県庁に出向して行政施策のプロセスと進め方を学んだ。これを本人は福祉現場の介護や相談援助とは違った事務業務の面白さがわかったと評価している。また32歳で県内の福祉系大学の実習業務に携わった。これもソーシャルワークの専門教育の現場に身を置いて、現場とは反対の視点から援助技術を捉える機会を得て刺激を受けたとしている。

⑬２人のよき父親で、出身が共働きのそれほど裕福ではない家庭なので親思いであると同時に、家庭や子育てに価値を置く。大学で院を勧められながらも親を安心させるために郷里に戻り、県職に受かりながら卒業時に空きがなく、経済的事情から先を待てずに事業団に就職するなど親思いが特徴である。同時に結婚も自分が保護的な立場になる相手を選び、若くして自分で設計した家を持つなど、家庭的である以上に家長としての責任へのこだわりがある。ソーシャルワーカーは一般に個人生活を優先するより、仕事や職場中心が多い傾向だが、C雄さんは珍しいマイホーム型のソーシャルワーカーといえる。これからは良い意味で個人生活も大切にするソーシャルワーカーが増えていくだろう。

⑭ルーツが心理職なので、ソーシャルワークについて専門家ではないというコンプレックスがあった。それを払拭するため社会福祉士資格を26歳で取得し、自分の専門性に自信をもつことができた。その後の施設内異動の相談指導課では早速、家庭の支援や地域との連携でソーシャルワークを発揮している。

その他には、職場内の先輩や同僚からの刺激や研究より、行政や大学への出向など施設外での刺激と経験を大きく評価している。将来の管理職候補だが、現場職員・後輩からの信望にかかっている。活動・仕事タイプとしては定住型で、学習・研究タイプとしては内向、独立型といえよう。

［D夫さん自身があげる主要な力量形成の契機］
①社会福祉実践上の経験
⑨地域への関心の拡大
③職場内の優れた先輩や指導者との出会い

①27歳で社協の最初の仕事が精神障害者のボランティア講座の担当になり、地元の当事者講師から仲間の会、小規模作業所の立ち上げを持ちかけられ、そのボランティアメンバーの組織化や情報収集から研修実施までどっぷりつかる。この達成感がその後の地域での活動の基盤にある。障害者の妹さんやお母さんの地域での活動を間接的に見ていたこと、地域の柔道場での子供たちへの指導経験、それらが社協での仕事にうまく生かされている。

⑨地域の配食サービス、ボランティアセンターでの仕事、阪神淡路大震災でのボランティアの経験から地域への思いは将来小中学生へのボランティア教育に力を入れたいとの夢でわかるように強い。これは地域の子どもの柔道指導がまさに青春そのものだったことと大いに関係している。

③最初の精神障害者の小規模作業所への活動、社会福祉士受験派遣への推薦など常に自分が迷っているときに後押ししてくれる職場の先輩がいた。優れたモデルというより、「お前がやらなきゃだめだ」けしかけてくれる先輩で、自分からやろうと名乗りを上げるタイプでないD夫さんの性格をよくわかって、要所で指示してくれる良き指導者といえる。

その他には、精神障害者の小規模作業の立ち上げ期のかかわり方には、重度の知的障害者の妹さんとその世話に熱心だったお母さんの影響が大きいと推察される。町の柔道場で子どもたちの指導が青春だったほど、もともと地域密着型の若者だった。シャイなため福祉を通じてなら結構、自己アピールができるという福祉自己主張型。職場の和を大切にし、先輩や仲間から一目置かれているが、無二の親友とか恋人はいない。

## 2　二人にとっての国家資格取得の契機と意味

今回の二人は地方都市の普通家庭出身で、大学進学では福祉を選択してはいない。一人が姉の仕事の影響で心理を選び、たまたま心理職で就職が敵わず、当座の就職として知的障害者施設の職員となる。片や、妹が知的障害者のため、福祉施設やボランティアには馴染んでいたものの、自分の仕事にしようとは考えていなかった。しかし中小企業の営業を経験しているうち、一族経営への疑問から第二の職場に社会福祉協議会を選んだ。

福祉系大学で学び、卒業間際の短期間の集中勉強で社会福祉士資格を取得していく若者にとっては、中途取得者が業務と通信課程のスクーリングや受験勉強を両立させ、２年以上もかけて資格を獲得するほどの憧れの強さは想像を絶するものであろう。ましてや家庭生活や実践活動との両立への苦労と努力についても理解不可能だろう。ということはその資格の価値の重さは、中途取得者と学卒取得者では月とスッポンほどの違いがあると言えるだろう。

しかし、取得してしまえば皆同じラインに並ぶ、いち社会福祉士である。資格とは所詮そういうものであり、その中身の違いは本人自信が一番わかっており、望むらくは、利用者もわかる人は違いが判ってくれると思いたい。また努力した人ほど、わかる利用者が評価してくれれば良い、と自信と余裕を持って考えられる。それが資格の本当の意味でもある。

社会福祉士は介護などケアとは違い、相談援助というジェネリックな業務である。特に今回の２事例は大卒でもあり、業務をこなすだけの教養と常識はあるので、資格はなくとも実務に不自由は感じられていない。にもかかわらず資格取得に挑戦した動機は、C雄さんの場合、同じ職場内の医療職など他の専門資格取得者への良い意味の対抗意識であった。D夫さんの場合は、職場内の資格取得奨励制度に触発されたとはいうものの、二人とも異分野からの参入であるコンプレックスを払拭したいという、隠れたチャレンジ精神、動機が共通している。これも資格取得への勉学と努力の過程でいつの間にか超越してしまっている。

通信課程の勉学と業務との両立については、大学受験や大学の勉強経験も手伝い、猛勉強したほどではなく合格している。そのため合格によって感激したというより、取得はともに長い福祉の専門職人生の基礎固めとして気負わず、むしろ職務上の義務として位置づけている。ただ取得後、じわじわとした自信につながり業務に張りが出ている様子ははっきりうかがえる。

## 3　中途資格取得者の存在の意義

資格取得に対する意気込みや、取得後の反応も個々にまた、前２例と今回の２例では異っている。資格取得と専門職アイデンティティ獲得との関係、二つを結ぶプロセスは個々のライフヒストリーに描かれるように様々であるが、取得後、業務や利用者、社会へ向かう姿勢に大きく何か一貫した共通の余裕のようなものが感じられる。これが専門職の自負、専門職倫理というか、プロフェッショナルな責任感や職業意識が収斂したものではないだろうか。

国家資格とはいえ名称独占で、合格率も弁護士や公認会計士に比べるとやさしく、難関とはいえない。また誕生も高齢化社会への対応策である介護福祉士資格に付属してできた社会福祉士資格とも言われる。しかし、その後の福祉サービス隆盛によって、社会的関心と志望者数が高まり、いくつかの職種の採用要件にも盛り込まれる位置まできた。しかし、名称独占のゆえ「実像のない社会福祉士」「なくても同じ社会福祉士

資格」などと皮肉られる。

今回の２事例や前回（その１）のように、すでに実践を充分こなしていながらも、あえて苦労して中途で資格を取ろうという者の資格への憧れと取得後の自負の念こそ、この資格の社会的地位を高めるのに大いに貢献しているといえる。そして、このような先輩の資格取得への努力や姿勢を社会が評価し、特に後続の現場従事者たちは、専門性と国家資格への尊敬の念を改めて深めていくのではないだろうか。

大学卒業と同時に資格取得している従事者は、これらの先輩が高めた社会的評価の有形無形の恩恵を間接的に受けることになる。そこで、後続の使命として、専門職の自己研鑽への姿勢と仕事への情熱を持ち続けなければならないだろう。また今回の事例のように、他分野の大学教育や一般職の経験を経て福祉現場に入った先輩から、福祉教育には不足しがちな一般社会人の視点、視野の広さも参考にしてほしい。なぜなら福祉の実践活動の多くは、一般社会の中で普通の人々にむけて行われるものだからである。

〈なお本研究は平成16年度、科学研究費補助金を受けたものである。〉

**参考文献**

保正友子他　2002　「成長するソーシャルワーカー」筒井書房

榊原　清則　2004　「キャリア転機の戦略論」ちくま書房

坂野　尚子　2001　「キャリアカウンセリング」日本法令出版

鈴木眞理子　2004　「若きソーシャルワーカーのライフヒストリー研究（その１）」～専門職アイデンティティと国家資格取得～　岩手県立大学社会福祉学部紀要　７巻１号　51～62

武野　昭　　2001　「人と組織を変えるコンピテンシー」オーエス出版

梅沢　正　　1998　「職業とキャリアー人生の豊かさとはー」学文社